

Trumpet

Oboe

【オーボエ(木管楽器)】

♪2枚のリードを使用して演奏するダブルリード楽器の仲間。
♪哀愁のある、甘く美しい音色が特徴。木管楽器の中で最も難しい楽器。

リード

【トランペット(金管楽器)】

♪明るく輝かしい音色が特徴。
♪ファンファーレや華やかなメロディ担当の花形楽器。

iichiko総合文化センター 大分県立美術館

こどもたちへ

～芸術文化の学校連携～

iichiko総合文化センター

センターでは学校や地域と連携して子ども達に本物の音楽や舞台公演の鑑賞機会を提供する取組を、企業からの支援などにより進めています。今回はアウトリーチ活動(おでかけクラシックコンサート)についてご紹介します。

今回は

7/28(火)/ 桜町こども園

コロナウイルス感染拡大防止のため活動を中止していた「おでかけクラシックコンサート」を約6か月ぶりに感染防止対策をとって開催しました。

今回演奏した「フェリーチェ楽団」は、オーボエとトランペットという珍しい組み合わせのユニットです。最初にハチャトゥリアン作曲の「剣の舞」をこの2種類の管楽器だけでリズムカルに演奏すると、0～6歳までの園児約120名は、その見慣れない楽器の形や音色に早くも興味津々。オーケストラメドレーで「ウィリアム・テル序曲」[第九]「天国と地獄」を披露すると、運動会で聴きなじみのある曲では子どもたちが手をたたき、体を動かすなど全身で音楽を楽しんでいる様子が見られました。それぞれの楽器紹介をしながら、オーボエの代表曲として、チャイコフスキー作曲「白鳥の湖」より「情景」を、トランペットではアニメ「天空の城ラピュタ」の劇中曲「ハトと少年」を演奏。続いてバッハのお面を被っ



た二人が、ピアノ曲「インベンション4番」でピアノの右手部分をオーボエで、左手部分をトランペットで奏でました。童謡の作曲家・中山晋平メドレーでは、まだ梅雨が明けぬ大分にちなみ、「てるてる坊主」「あめふり」「あめふりお月さん」を演奏。音に合わせ、先生や子どもたちが一緒に歌い、手を上げ下げする姿に会場は一体となり、興奮の渦となりました。最後に童話「パパ、お月さまとって!」を大きな絵本で朗読したあと、フェリーチェ楽団お得意の、その時心に描いた思いを二人が即興で演奏する「音姿(おとすがた)」を披露し、約1時間のコンサートを子どもたちの大きな拍手で締めくくりました。

アーティスト

フェリーチェ楽団

楽器店で知り合った二人が、「これまでにない音の世界を創りたい!」とオーボエとトランペットでユニットを組んで6年。世界でもかなり珍しい組み合わせ。今回のコンサートについて、「コロナの影響で、いつものように会場を歩き回って近くで音を聴かせたり、音楽体験はできなかったけれど、子どもたちの反応も良く、のびのびとした雰囲気の中で演奏を楽しんでもらえてよかったです」と語ってくれました。

大城裕美さん (オーボエ)

得丸幸代さん (トランペット)

びじゅつかんの旅・旅したく

学校や園から美術館へ訪れることを「びじゅつかんの旅」と呼んでいます。通常の団体見学とは異なり、作品解説ではなく、美術館スタッフと「一緒に見る」ギャラリーツアーです。作品に近づいて視たり、離れて視たり、時には角度も変えて視ると、いつの間にか自分の視点ができてきます。

そして旅には準備が必要であることから、美術館に来る前に「びじゅつかんの旅したく」として美術館スタッフが学校や園に出向き、ワークショップを行っています。美術館に来るための事前学習や、作品を見る意識を高めるといってではなく、自分の目で楽しく作品を見るために、心も身体もウキウキすること(感性の活性化)をねらったものです。また、事前に美術館スタッフと仲良くなれば、美術館に行くのが待ち遠しくなるかもしれないという期待も込めています。

本年度は6月末に、大分県立鶴崎工業高校の建築科の生徒全員を対象に、「びじゅつかんの旅・旅したく」を行いました。「旅したく」では、指先で棒を支え、落とさないように動くコミュニケーション・スティックを使ってのウォーミングアップからスタートし、ユニークな建築をスライドで紹介しました。そして住んでみたい未来の家を想像して描きました。このスケッチは、現在2Fのアトリエに展示しています。「びじゅつかんの旅」では、コレクション展「ブラック&ホワイト」で、作品の素材やディテールに注目して楽しみ、企画展「坂茂建築展」では、様々なプロジェクトから建築への思いが一層強くなった高校生たちでした。

大分県立美術館

大分県立美術館の教育普及事業のひとつ「アウトリーチ」は、国の助成を受けながら、学校や地域と連携して行っています。今回は、この「アウトリーチ」の中から県内各地で行っている「出前ワークショップ」と「びじゅつかんの旅・旅したく」について紹介します。



美術館を少しでも身近に感じてほしいという思いから、美術館から遠く離れている地域や、美術館で作品を見るという行為から遠いと思われる盲学校でのワークショップを始めました。今では県内の園や学校に広く声をかけ、希望する声にはできるだけ応えられるようにワークショップを行っています。そして、今年なんと140カ所以上の園や学校から希望がありました。さすがに全部の希望を受け入れることはできず、残念です。

さて、どんなことをしているかというと、今はコロナウイルス感染防止対策に気をつけながら、なかなか学校ではできない、身体と感性を活性化する「体感型ワークショップ」の他、作って遊ぶ「工作ワークショップ」、元気よく身体全身で描く「絵の具ワークショップ」、作品と出会う鑑賞型「見るワークショップ」を行っています。中でも人気の「絵の具ワークショップ」は、すでに宇佐市の泉光こども園、竹田市の玉来保育園で行い、みんなの身体の数倍以上ある紙の上で元気よく絵の具だらけになりました。

ここで出会う子どもたちは、すぐに美術館へやってくることは難しいかもしれませんが、将来大きくなって行動範囲が広がった時、美術館のことを思い出して来館するきっかけになれば願っています。

生徒たちにできる限り美術館に来てほしい。しかし、なかなか足が向かないのも現実です。これら、学校との連携によるアウトリーチ事業は、将来の来館者、そして未来の子どもたちにもつながると信じて活動しています。